
思い出色々(鈴駒 × 流石)

0434

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出色々（鈴駒×流石）

【Nコード】

N1710B

【作者名】

0434

【あらすじ】

鈴駒を元気づける為に、彼女の流石が大活躍！漫画・アニメ共に鈴駒の方が尽くす方に見えますので、たまには逆を。

少女は、最近少年が自分という時にどことなく視線が泳ぐのに気付いていた。

「鈴駒く〜ん。」

甘えたような、

それでいて優しさのこもった声で名前を呼んでいるのは流石と言う名の妖怪の少女。

甘い栗色の、肩ぐらいの長さの髪、ぱっちりした目が愛らしい。

「あ、流石ちゃん！」

鈴駒と呼ばれた少年は自分の名を呼んだ相手を見て照れたように、それでいて嬉しそうに笑う。

先程の淋しそうな表情は微塵も無い。

少年の髪はショートカットのこげ茶色。

全体的にいかにも子供と言う風貌が可愛らしい。

少女と比べると少年の背は低く、幾分身長差があるが本人達は気にしていない。

「ね〜どうしたの？最近、何か元気ないよ？」

彼の隣にすんと座りながら話しかける。

「んー・・・別にそんなじゃないよ。」

けれど、流石は最近鈴駒が何かを隠しているのでは・・・？と思っていた。

まさか、浮気！？

「ま！私には言えないって言うの！？」

流石はぷうつと頬を膨らませる。

「さ、流石ちゃん・・・。」

「ひどい！！私に隠し事するなんて〜！！」

「あ！わわっ話すよ、話すから。」

「本当？」

「うん。でもきつとつまんないよ？」

「やっぱり隠すのね!？」

「わ〜！あ、実はさ、最近皆で一緒にいる事が無くなったな
て思ったんだよ。」

「皆？」

流石は首を傾げた。鈴駒が頷く。

「うん。」

「えつと耐・・・はいるじゃん、あそこに。」

「そうね。あつまた棗さんに負けてる」

この二人も、耐と棗の戦いを温かく見守っていた。

「それで？皆つて耐さんだけじゃないでしょ？」

「うん、陣とか凍矢とか・・・あと幽助とか蔵馬達とかさ。」

「皆、鈴駒くんの友達ね。」

（有名人ばかりだわ）

と、流石は心の中で呟く。自分の隣にいる鈴駒も含め、

名前を挙げたほとんどが強者として魔界に名前をとどろかしている。

「んーとさ、今までだってそれぞれ好き勝手に生活してたんだけど、

ここまで顔合わすことが無いって言うのもな〜とか思ってたんだ。」

「そっかー。それで淋しいのね？私がいるのに〜。」

「あーご、ごめんそんなつもりで言っただんじゃ・・・」

「いーのよ」

「ごめん！つまんなかっただろ、もう忘れてくれよ。ね？ね？」

「ふ〜ん・・・分かった」

流石の心の中には、ある計画が持ち上がっていた。

流石は、まず耐がよく修行している場所に出向いた。

「ねえ、耐さん」

「いよう！流石ちゃんじゃねーか、どうした？」

鈴駒の関係で、流石は耐とも何度か話したことがあった。

でも、実際二人だけで会々と耐は迫力があるな〜って思う。

「あの、鈴駒君の事で相談があるんです。」

「喧嘩でもしたのかあゝ？珍しいな。」

酎がにやにや笑いながら、近くの岩にどかと腰を下ろした。

「違います。」

「んで？」

「実はですね・・・。」

流石は鈴駒の事を酎に話した。すると、酎は大声で笑い始めた。

「がっはっは！やっぱあいつはガキだなゝー！！」

「笑わないで下さいよ！」

「んで？どうすりゃいいんだ？」

「それを相談しに来たんです！」

「んゝ俺にはあんまいい案は浮かばねえなあ。」

「そうですか・・・。邪魔してすみませんでした・・・。」

「あー！待てよ、あいつならいい案が浮かぶんじゃないか？」

「あいつ？」

「蔵馬だよ、く・ら・ま。」

「え！？あの蔵馬さんに・・・？」

「ああ。」

そんな訳で、流石と酎は蔵馬を呼び出した。

「よお！突然呼び出して悪かったな。」

「どうしたんですか、酎。ええと、そちらは・・・？」

「こ、こんにちは・・・流石です。あの、鈴駒くんの知り合いって言うか友達って言うか・・・。」

「ああ、鈴駒の彼女さんですね。」

蔵馬が微笑んだので、流石は目を見開く。

「えっご存知だったんですか？」

「ええ、貴女の話は随分前に聞いてましたよ。」

流石は心の中できゃー！と有頂天になっていた。

私達、そんなに公認だったなんて♪

「あ、あの宜しく願います！」

「こちらこそ。それで、どうしました？」

「はい、ええとですね・・・。」

流石は、また酎と同じ事を彼に話した。蔵馬が一つ頷く。

「なるほど、そう言う事ですか。」

「はい。」

「鈴駒がそんな風に思ってたとは知りませんでしたよ。」

「だろ？俺もな～にを不安に思ってるんだ？って感じなんだけどよ。」

やっぱそう言う所はいくら強くてもガキなんだよな。」

「それにしても」

蔵馬が流石に視線を戻した。

「え？」

「鈴駒はいい彼女を見つけましたね。」

その言葉で、流石は顔が赤くなる。

「そ、そんな・・・だって別に・・・。」

（自分の好きな人が辛そうだったら何とかしたいと思っじゃない？
当たり前前の事じゃない、そんなの。）

「いいですよ、人間界の皆には俺が連絡とりましょう。酎も頼みますよ。」

「おうよ！じゃ、俺は陣や鈴木を当たってみるぜ。」

酎は乗り気である。

「そんな、迷惑かけられません！」

「いいんですよ。鈴駒は友人ですし、俺も久し振りに皆で会いたいですからね。」

それから二人は皆の都合をつけていつ会う約束をするか等色々話し合っていた。

やがて、話がまとまったのだろう。

蔵馬は一度人間界に戻り、何かを持ってきた。

「これが人間界の道具で、カメラって言っんです。」

流石はカメラと言うものを初めて見た。

「カメラ・・・？」

「ええ。」

蔵馬が頷いた。

「写したいものに向かって、ここで見ながらレンズを向けて、このボタンを押すとそこから見える範囲がこうなって出てくるんですよ」

そう言うと蔵馬さんは四角い絵の入ったアルバムと言うものを見せられました。

小さい頃の蔵馬さんが、優しそうな女の人と一緒に写っている。

「この人が、僕の母親なんですよ」

と、蔵馬さんは楽しそうに教えてくれました。

それから私は蔵馬さんにお礼を言って、人間界を後にしました。人間界のお友達は、蔵馬さんが後で集めてくれると言うのであるべく早く帰って来なくっちゃ。

魔界へ戻ると、鈴駒の友人達のいる場所へ行った。

「おい、流石かあ？」

酎が準備できたぞと手を振って待ち構えていた。

成る程、不思議そうに自分を見ている妖怪が数人いる。

「はい！」

流石は魔界統一トーナメントに出ていたから、

すれ違いざまに姿を見かけた事はあったのだけれど、

やはりこんなニS級妖怪がいるとその迫力は凄まじいものがあつた。けれど彼らは楽しそうににこにこ笑って近付いてきた。

「鈴駒の彼女か？可愛いな。」

くせのある赤い髪に青い瞳、一本のぞいている角。

陣さんだー！それに凍矢さんや、鈴木さんや、死々若丸さんもいる！

撮影し終わったところ、

蔵馬さんから人間界の皆を集めたと連絡が入り、人間界へGo！！

蔵馬さんが、幽助さんや桑原さん、それに桑原さんの恋人である雪菜さんや、

幽助さんの奥さん蛍子さんと言うガールフレンドまで呼んでくれた。
肝心な蔵馬さんのガールフレンドは？と思っていたら、

幽助さんがぼたんと言う人なんだ、と教えてくれた。

やがて、一つのプレゼントが完成した。

写真を貼り、

皆のメッセージを書いた色紙を綺麗な袋に入れ、

自分でラッピングした包みを持って流石は彼の元へ向かった。

そして流石を待つ傍らヨーヨーを弄んでいる鈴駒を見つける。

「鈴駒く〜ん！！」

鈴駒が駆け寄ってきた。

「あ、流石ちゃんどうしたの？急に呼び出して・・・」

「あのね〜プレゼントがあるの。」

「プレゼント？」

鈴駒が首を傾げた。

（特にプレゼントされる日でもないんだけどな〜）

と不思議に思っている。

「これこれ」

と、何か包みを差し出してきた。

「何？」

「い〜から見て！」

「う・うん。」

流石が嬉しそうに差し出した物を受け取り包みを取って見る。

と、鈴駒は驚きの余りに言葉を失ってしまった。

女の子らしい可愛い色紙が二枚。

中央に集合写真が貼っており、仲間達からの鈴駒へのメッセージが

書いてある。

一枚目は人間界に住んでいる彼らが写っていた。

幽助と彼女の蛍子ちゃん。

黒い髪の女は誰だろ？幽助にちょっと似てるかもね。

姉さんかな？

それに蔵馬と・・・うわ、懐かしいな、桑原と・・・氷女の子
(あ、桑原の彼女だっけ)

とこれは誰だろう？

長い茶髪の、少しきつそうだけど美人が写っている。

誰かの友達かな？

もう一枚は魔界に住んでいる彼ら。陣と凍矢、そして鈴木に死々若丸。

酎と彼に引つ張られる形で九淨さんと棗さんが写っている。

「えへへ、ちよつとあちこち行つて皆に会つて来ちゃったの。」

さすがに皆一緒に…つて訳にはいかなかったけどね。」

「わざわざおいらの為に？」

「そつに決まつてるじゃない！」

珍しく顔を赤くして鈴駒を見つめた。

「鈴駒君が沈んでるのつて、見てて辛いのよ？」

「へへっ・・・。」

「流石ちゃんありがと、オイラ・・・すつごく嬉しいよ。」

「良かった！でもね・・・」

「え？」

流石は鈴駒の持っている色紙を軽く叩く。

「こんなの無くて、皆は鈴駒くんの事大好きみたいだけど。あんまし心配する事無いんじゃない？」

「うん・・・。」

「あ、やだちよつとしんみりしてる？」

「違つて!!」

鈴駒は帽子を深く被ると、頬を伝うものを密かに隠した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710b/>

思い出色々(鈴駒×流石)

2010年10月15日21時51分発行